

「福島市役所」

中年女性
若い女性
若い男性
年配の男性（上藤さん）
奈美
チバ君
先輩
1階にいる市民たち
妹尾さん
たけしくん
食堂職員の女性
セロテープの職員
エレベーターの中の他の職員
など

福島市役所1階

横方向に広い待合スペースがあり、合皮のピンク色のソファが並んでる。
それなりに人がいて、歩いてきて座ったり、柱に据え付けられたNHK総合が流れるテレビモニタを見たり、広報チラシを手に取ったり、エレベーターに向かって歩いて行ったりしている。スペースの中央には窓口に背を向ける形でメインエントランス側に向かって案内ブースがあり、スーツを着た外注の職員が一人座って、迷ってうろついている人に適宜声をかけている。

窓口の内側に立ってしばらくソファスペースを見ている国保年金課の中年女性。
中年女性「628番の方～、628番のかた～」
窓口から大きな声でソファのスペースに呼びかける。
太っている。

またしばらく待合スペースを眺めて
中年女性「628番のかたー」
若いカップル二人が柱のテレビモニタを見ている。

ブースの中の中年女性、横のボタンを押す。
機械音声「お待たせしました、629、ばんのかた、2、ばん、の窓口まで、おこしくささい」
若いカップルの女性の方がソファから立って窓口に向かう。
男性の方は女性に相槌を打って、ソファに座ったままモニタを見ている。
中年女性「はい、こんにちはー」
椅子に座ろうとする若い女性。
座る前に若い女性が机に置いた書類を見て、もう喋り出す中年女性。

中年女性「失礼します。保険の切り替えですね」
回る椅子を自分の方に向けて座る若い女性。

年配の男性が、窓口にゆっくり近づいてくる。
認知症か知的障害かわからないが、不必要な動作が移動中に混じっている。

若い女性「会社の方で健康保険に入ったんで、これ、就職して、今入ってる保険切り替えるよ
うに言われたんですけど」

中年女性「会社の方で？ 入社年月日は、今年の、四月」

若い女性「はい」

中年女性、脇にあるパソコンに向きを変えて

中年女性「もう切り替わってるかな、ちょっと見てみます」

若い女性「え、自動的に切り替わるんですか」

中年女性「ええ、新しく入れた保険のほうからそういう申請出てるはずですね」

若い女性「あー、そうなんですか。えっとじゃあこの書類は」

年配の男性が同じペースで近づいてくる。

中年女性「こんにちは」

若い女性、気がついて振り向く。

中年女性、番号札を年配の男性から受け取る。

若い女性「あ、すみません」

中年女性「いえ、奈美ちゃん、ちょっと、上藤さん」

その間にもエレベーターに向かう人、ホールを通り過ぎる人、案内ブースに声をかけ
る人、はそれぞれ動いている。

中年女性、若い女性の方に向き直り、いままでの作業を続ける（→※へ続く）

奈美、カウンターを回り込んで年配の男性の横に来る。

奈美「上藤さん、こんにちは」

奈美、年配の男性をソファの一番前の列に座らせる。

年配の男性、ものすごくゆっくりと座って、ものすごくゆっくり胸元からハガキ大の何
かを取り出して奈美の前に置く。

奈美「はい、こんにちはー」

年配の男性「（なにか言っているが客席には聞こえない）」

奈美「これね、失礼します、ちょっと見せてくださいねー」

いつも同じことをやっている。

年配の男性「（聞こえない）」

奈美「うん、うん、平成23年の。」

年配の男性「（聞こえない）」

奈美「うん、ポストに入ってたから、」

年配の男性「（聞こえない）」

奈美「気がつかないよね、それじゃあねえ、うん」

年配の男性「（聞こえない）」

奈美「今日はここまでどうやってきたの？」

年配の男性「（聞こえない）」

奈美「今日はここまでどうやってきたの？」

年配の男性「（聞こえない）」

奈美「あ、そう、どこに置いたの？」

年配の男性「（聞こえない）」

年配の男性、メインエントランスの向こう側（自分の背後）に振り向いて指差す。

奈美、そちらにちょっと目をやる。

奈美「へー！すごいわねー！、それは大変だったでしょ！」

年配の男性「（聞こえない）」

年配の男性、笑う。

笑いながら何か言っているがやっぱり聞こえない。

年配の男性、ハガキを奈美の手から取り、自分の胸にまたゆっくりしまう。

奈美「オッケー？はいつた？」

胸ポケットを確認し、年配の男性を補助しながらエレベーターの方へ二人でゆっくりと行く。

エレベーターに乗る。

（→※）

若い女性「あの、じゃあこの書類は」

中年女性笑いながら

中年女性「ああ、ええ、そういうのも一応ありますね。」

若い女性「会社からこちらに出すようにって言われたんですけど」

中年女性「あ、切り替わってますね」

画面を指差す中年女性。若い女性、パソコンのほうに少し身を乗り出す。

中年女性「平成28年4月28日に。」

中年女性の指先を見る若い女性。

若い女性「あー、じゃあ、もう、これで」

中年女性「ええ、もう大丈夫です。どうも、わざわざお越しいただいて。」

若い女性「そうですか、ありがとうございます」

中年女性「はい、ありがとうございました、お気をつけて」

横のボタンを押す。

機械音声「お待たせしました、630、ばんのかた、2、ばん、の窓口まで、おこしてください」

男性がモニタを指でさして

若い男性「これいつ？」

若い女性「今朝。起きたらニュースでやってたよ」

若い女性と若い男性は連れ立って出て行く。

中年女性「630番の方～」

誰もこない。

フロアーには人が往来していたり、座っていたりする。

機械音声「お待たせしました、630、ばんのかた、2、ばん、の窓口まで、おこしてください」
中年女性「630番の方～」

誰もこない。

横のボタンを押す。

機械音声「お待たせしました、631、ばんのかた、2、ばん、の窓口まで、おこしてください」

===よきところではじめる===

ソファに座って書類カバンを整理しているチバ君。

すぐ横にもう一人スーツのひとが座る。

チバ君「あ、すみません。、、なんだ、先輩。」

先輩「なにしてんの？」

チバ君「え？ってというか、逆になにしてんすか？ エリア外ですよ、ここ。」

先輩「だよ。なにしてんの？」

先輩、テレビを見ている。

チバ君「、、、資料整理、かな」

先輩「あそう。昼いかない？」

チバ君「え？まだ11時っすよ」

先輩、テレビを見ている。

チバ君「自分アポあって、これから4階行きますけど。」

先輩、テレビを見ている。

チバ君「郡山、でしたっけ？」

先輩「ロジスティックス？」

チバ君「はい」

先輩「ああ、行ってきた。いいんじゃない。サイネージ、160台入れるって。」

チバ君「160台、へー。さすが」

先輩「まあサイネージだから。4階総務？」

チバ君「はい」

先輩「妹尾さん？」

チバ君「はい」

先輩「じゃあいく」

チバ君「あ、、、はい。」

先輩「整理できた？」

チバ君「あ、はい」

二人、立ち上がってエレベーターのほうに行く。

チバ君、上へ、のボタンを押す。

エレベータ前で待つ。

先輩「こっち側きたことないな」

チバ君「そうなんですか」

先輩が奥の方へ行く。

少ししてもどってくる。

先輩「冷蔵庫がある」

エレベーターのドアが開く。

二人、中に入る。

他の職員と、市民も乗り込んでくる。

チバ君が4階のボタンを押そうとすると

他の職員「何階ですか？」

チバ君「あ、4階で、すみません」

3階でいったんだアが開く。

一人降りる。

4階でチバ君と先輩、降りる。

総務企画課のカウンターで

チバ君「こんにちは、お世話になっております。キャブソン福島支店の、あ、妹尾さん、どう

もー、お世話になりますー」

妹尾さん「チバくん、ちょっと待ってて。ああ、大竹さんか、なんだ、ご無沙汰です」

先輩「こんにちは」

妹尾さん、打ち合わせブースでセロテープを使った作業をしていた職員に声をかける。

妹尾さん「ちょっとごめん、それ、あっちでもいい？」

セロテープの職員、移動する。

先輩「ネタは？」

チバ君「超短焦点の壁掛けのやつ、前、話に出たんで、それっすかね」

先輩「あそう」

妹尾さん「どうぞ」

カウンターをこえて打ち合わせブースに行く二人。

打ち合わせブース

妹尾さん「どうしたんですか？今日は」

先輩「いやいや、こいつがさぼってゲーセンで遊んでるうちに大負けして腹いせに会社の車乗り回してビール買い込んで海行ったりしてないか監視に来たんです。」

妹尾さん「ははは」

先輩「な」

チバ君「はい」

妹尾さん「え？」

先輩「昔、入社3ヶ月でキレちゃって」

チバ君「すみません」

妹尾さん「あそう」

先輩「よく持ち直したよね、普通ダメだけど」

妹尾さん「へー」

チバ君「いえ、海は行ってないっす、そのときは」

妹尾さん「海？」

先輩「高校のとき学校サボって海行ってたんですよ。」

妹尾さん「チバ君、、、あそう」

先輩「3ヶ月連続で。親のふりして毎日学校に電話して。バカだから面談日にも電話して、親が知らずに来ちゃってばれたんだよな」

チバ君「はい」

妹尾さん「あそう」

チバ君「すいません」

妹尾さん「、、、で、海で、何してたの？」

チバ君「いえ、なんというか。ただ、海を見ました」

妹尾さん「え？あそう、毎日？」

チバ君「はい」

妹尾さん「チバ君生まれは？」

チバ君「二本松です」

妹尾さん「二本松から？」

チバ君「はい、あ、マリンパークなみえって」

妹尾さん「ああ、はいはい、ゴルフコースあったよね」

チバ君「そうです、その向こう側が海岸になってていつも誰もいなくて」

妹尾さん「あそう、毎日？」

チバ君「はい」

妹尾さん「毎日その海岸行ってたの？」

チバ君「はい、原付で、東へ」

妹尾さん「片道どれぐらい？」

チバ君「2時間ぐらい。っすかね」

妹尾さん「だよねえ」

チバ君「はい、だいたい。下道で」

妹尾さん「まあ、でもそんなもんか。海ね。（窓の外を見る）2時間か。こんどまた行ってみようかな。」

チバ君「はい」

妹尾さん「東へ、、、ツフ、はははははっ！（とても笑っている）」

しばらく一人で笑っている妹尾さん。

先輩「最近どうですか？」

妹尾さん「え？ ああ、まあ、どうもこうもないけど、夏休み前ってイベントの告知が増えるんですよ、なにかと。一階のコピー機貸し出しコーナー、列できちゃうぐらい。見ました？」

先輩「ええ、さっき」

妹尾「学校の休み期間中のイベントが増えて増えて。コピー機って自分で紙入れてくれないのかな。ないの？そういうの」

先輩「ないですね。さすがにそれは。」

妹尾さん「そっかー」

チバ君「トナー関係のお届け、ちょっと増やしましょうか？」

妹尾さん「そうね。去年と同じで」

チバ君「はい、あと、こちら、先日前話しされてたプロジェクターです」

カタログ写真を取り出してみせる。

妹尾さん「ああ、これ」

チバ君「だいぶ場所取らないんで」

妹尾さん「これなに？ここに置いてこうなるの？」

チバ君「はい」

先輩、携帯電話がなる。

先輩「失礼します」

妹尾さん「なに、15センチでいいの？この距離が。」

先輩、ブースから外に出て、電話を耳に当てながら窓際の方に行く。

妹尾さん「だいぶ省スペース。というか、これ、ここから光が出てるから、こうやってかがんだりしなくていいんでしょ？影ないもんね。」

チバ君「そうっすね。スクリーンにレンズが近いんで。明るい部屋でもこんな感じで見えてます」

妹尾さん「へー、いや、会議とかでつかうってことはないんだけど、たぶん、9階の講堂、しってる？」

指で上を指す妹尾さん。

チバ君「いえ」

妹尾さん「あそうか、まあ小さいホールみたいなところ。そこでね、シンポジウムとかやってくるのよ。時々。前に人が並んで、こうやって。で、発表する人の名前をね、いままでは紙に書いて机に貼ってたんだけど、それだと後ろの席から見えないって苦情があってね、横に出したほうがいいかなって話になってて」

チバ君「ですよー。わかります。横ならね、邪魔がないから。」

先輩、窓際で窓の外を見ながら電話している。

妹尾さん「うん。けど、普通のプロジェクターだったら狭いでしょう、あそこ。ここに置いたらこうなって、ここ通る人のアタマが全部映っちゃって影になっちゃうじゃない。だから置いたらだれもここ通れないよって話だし、立ったらメチャクチャ眩しいし、また名前が影になって見えないって苦情が来ても、無駄だしね」

チバ君「試してみます？」

妹尾さん「え？いいの？これそんなに高くないけど」

チバ君「ええ、持ってきます。こんど。こんなちっちゃいんです」

妹尾さん「たけしくん、持ってきてくれるって」

ブースの向こうで、パソコンに向かってるたけしくんに声を掛ける。

たけしくん、微笑み返す。

チバ君、たけしくんに会釈をする。

妹尾さん「9階予約しといてよ。いつがいいかな」

チバ君「あ、いつでも、来週の木曜の午後イチとか、いかがですか？」

妹尾さん「来週の木曜の午後イチ空いてる？」

たけしくんに問いかける妹尾さん。

妹尾さん「大竹さん、またこっちの担当になったの？」

チバ君「いえ、今日はたまたま」

妹尾さん「あそう、なんだか全然変わらないね」

チバ君「そうですか。ずっとあんな感じで」

たけしくんが、OKサインを出す。

妹尾さん「木曜空いてるって。」

チバ君「じゃあ、そこでおねがいします」

妹尾さん「悪いね。ありがとう」

チバ君「あ、あの、あと、こちらのカタログもよかったら。うちの秋からの新しいのとかも入ってるんで。」

妹尾さん「あ、すみません、もらっときます。大竹さん戻ってこないね。昼か。じゃ、エレベーター混むからこれで、大竹さんによろしく。あ、あと今度またこれ（ボウリングの仕草）行きましようって」

チバ君「はい、言っときます。どうも、ありがとうございました。失礼いたします」

アタマを下げて、ブースから出て行くチバ君。

電話をかけながら近づいてくる先輩と合流して二人でさっき乗ってきたエレベーターの方に行く。

先輩「フィジーですか。いいなあ。」

チバ君、下行きのボタンを押す。

先輩「いつからいつまで？ 8月13から、28？ え、お盆と夏休みど真ん中じゃないですか！

メチャクチャ高い時期ですよ？ リッチだなあ。」

エレベーターの扉が開く。

満員で乗れない。

チバ君、別なエレベーターを呼ぶボタンを押しに行く。

先輩「え、そういうのって、向こうの家族の分とかもこっちもちなんですか？ あー26人、なるほど、さすがにそれはお互いね。気を使って。あははー」

別なエレベーターの扉が開く。また満員で乗れない。

チバ君、さっき満員だったエレベーターを呼ぶボタンをもう一度押しに戻る。

先輩「成田離婚って、死語ですよ死語！ もう、ねえ。は、おそらく、それは一、ビジネスってことじゃないですか、おそらく。ビジネスエコノミーなら。ビジネス、クラス、でしょ？ 間違いはないっすよ。は一、ホワイトボード使って。まわりに魚がたくさんね。はい、あ、それじゃ、見積もりどちらに、あ、メールで、はい、わかりました。今日中にお送りします。ありがとうございます。失礼します」

上に行くエレベーターが止まる。

先輩乗る。

チバ君「上っすよ」

先輩「うん」

チバ君乗る。

チバ君「食堂いくんですか？」

先輩「食堂っていうか9階」

エレベーターが開いて降りる。

先輩「あ、食堂がある」

チバ君「だから言ったじゃないですか」

エレベーターホール横の窓際に、年配の男性と奈美がいる。

奈美「はい、じゃ、いってらっしゃい」

年配の男性、何か奈美に言うが聞こえない。

奈美、エレベーターに乗る。

年配の男性、窓の外を見ている。

チバ君「さっき妹尾さんが言ってたホールって」

先輩「そう、あれ。鍵あいてるんじゃない」

チバ君、ホールのドアまで歩いて行って手をかけてみるが開かない。

チバ君「だめっす」

先輩、窓へ目を向ける。

先輩「あ、へー」

チバ君「9階でも意外と高いですね」

先輩「そうだね」

チバ君「新しい高速、このへんからこうやって、あっちのほうに曲がっていくらしいですよ」

チバ君がいずれできる高速のルートを示す。

先輩「ふーん」

しばらく外を見ている。

先輩「もう昼ここでいいか」

チバ君「はい」

9階を横切って食堂の方に歩いていく。

食券を買う二人。

先輩が紙幣をチバ君にわたす。

チバ君「ありがとうございます。すいません。」

先輩「カレーうどんにしたら？」

チバ君「やですよ。シャツにハネるから。」

先輩、笑う。

先輩「日替わりでいいや。まずいかな」

チバ君「あー、日替わりまずかったら全部まずいんじゃないですか？」

先輩「そっか。賢いなお前」

年配の男性、エレベーターに乗る。

(この後、降りずにずっと一つのエレベータに乗ったまま昇ったり降りたりしている)

列に並ぶ。

食券番号を読み上げている職員の女性がいます。

職員の女性「82番の方～、おまたせしました、日替わりです」

ぐるりととりかこむように待っている人たちがいます。

チバ君「妹尾さん、時々なに考えてるかわかんないんですね。」

先輩「うん」

チバ君「やっぱりそうですか」

先輩「いや、別に」

チバ君「なんか、こっちが言ってることと全然関係ないことずっと考えてそうで」

先輩「別にになにも考えてないんじゃない」

チバ君「そうですかね」

先輩「そう思っとけば」

チバ君「そうか。」

チバ君「2係のとこの代理店、減ったんですか？」

職員の女性「208番の方～ざるそば大盛りお待たせしました」

先輩「減ったっていうか、減っちゃった、でもいいんじゃない。間口がまとまったってことでしょう。町の電気屋なんてそう何件もないよ、今時。残ってた方が奇跡だよ」

チバ君「まあ、そうですけど。どこがいなくなったんですか？」

先輩「杉原さん、三和ナショナル、あとは、マイコン福島、かな。ここ1年で。まあでもペース早いよね。田原さん、2係人減らさなきゃって冗談言ってたよ」

チバ君「冗談か。電気屋やめたら何するんだろう。」

先輩「さあ、農業？かな。」

チバ君「え？」

先輩「汚染土かもっていうリスクはあるけど、今、土地の買い時だと思うよ、実は。市内なら農業やって東京で売っても、5年前ほど風評ないらしいしね。この分だと10年もすれば元に戻るよ。電気屋やめてそこの土地売った金で国道沿いに家電量販店出すってわけにもいかないしね。」

チバ君「冗談ですか？」

先輩「いや」

チバ君「はい」

先輩「なに、怒ってるの？」

チバ君「いえ、別に」

職員の女性「209番の方～ざるそばお待たせしました。お水はあちらです。」

チバ君「これ、わざわざああやって呼ぶ必要あるんですかね？」

先輩「ん」

チバ君「できたら中の人直接番号呼べばいいじゃないですか」

先輩「ああ」

チバ君「ほら、ああやって。あの人に中の厨房の人が番号言って、わざわざ二度手間じゃないですか」

先輩「そうね」

チバ君「頼んだ内容言わなくていいし。番号の意味ないじゃないですか。」

職員の女性「211番の方～キツネうどんお待たせしました」

先輩「200番台が麺だな。」

先輩「最近残業減らしてるの？」

チバ君「はい。資格とろうと思って。MBA」

先輩「通信で？」

チバ君「はい」

職員の女性「83番の方～、おまたせしました、日替わりです」

先輩「すぐとれるでしょ。自分なら。」

チバ君「そうっすか」

職員の女性「224番の方～、おまたせしました、水餃子です」

先輩「水餃子って麺なの？」

チバ君「じゃないですかね？うどんみたいな」

先輩「資格はとった方がいいかもね。28でしょ、そろそろ配属変わる時期だし」

職員の女性「84番の方～」

先輩「座っとくわ」

職員の女性「おまたせしました、日替わりです」

トレーを受け取った先輩、空いている席を見つけて座る。

天井から吊り下げられたテレビを見ながら食べ始める。

チバ君が自分のトレーを持ってくる。

横に並んでテレビを見ながら食べる二人。

チバ君「MBAとってどうってわけじゃないですけど、少しは選択肢ひろがるかな、と思って」

先輩「チャンネル変えたい。」

チバ君「え？」

先輩「民放なにやってる？」

チバ君「リモコンは、ない、と思います」

先輩「冗談だよ」

チバ君「水、ありますか？」

先輩「うん」

チバ君、二人分の水をトレー受渡し口の近くに置かれたポットからくんで戻って来る。

先輩「サンキュー」

先輩「配属変わったらどこがいい？東京？」

チバ君「そうっすね。それ以外、わかんないっす」

先輩「あそう。なんで」

チバ君「え、規模が全然違うからですかね。マーケットの。やっぱり同じ営業でもレベルって

　　いうか仕事の内容が根本的に変わりそうですし」

先輩「まあそうなのかな」

チバ君「やっぱりそうですか」

先輩「行って戻ってきた身からすればたいして変わらないけど。結局」

チバ君「え、そうっすか？」

先輩「いや、何を仕事と思ってるかによるでしょ、そこは。レベルってなに？」

チバ君「受注規模」

先輩「そうね」

チバ君「え、ちがうんですか？」

先輩「100万円のディスプレイ1台売ると100台売るとちがうのかな」

チバ君「え、ちがいますよね。相手はでかい法人とか省庁になるわけだし」
先輩「ちっさい店の相手がでかい法人になっても、結局こっちがあつかうのはヒトだけなんだ
けどね。こっちのいる場所は営業でそこで立ち回れる範囲に変わりはないからね」
チバ君「それはそうですけど」
先輩「レベルって、それ幻想だと思うよ」
チバ君「ヒトの向こうのものが目的じゃないですか我々」
先輩「まあ、そういう考えもあるね」
チバ君「そういう、っていうか、え？それしかなくないですか？」
先輩「ヒトのむこうのものって何？」
チバ君「え、数字？」
先輩「簡単だな。」
チバ君「えー、よくわかんないっす。あそっか、もっとまわりに気を使えって話ですか？
クライアントの担当者とかに。」
先輩「ちがうよ、市場規模とか営業職だとか、置かれた状況に振り回されすぎだっっていつてん
の。場所が変われば考えも変わるタイプだ、お前は。」
チバ君「うーん、わからないです」
先輩「あつかってるのはヒトだっって話。その数字もヒトなの。」
チバ君「え？数字は数字じゃないんですか。っていうかわかりますよ、数字の中身はヒトだっ
てことは。顧客のニーズを読んでそこうめるだけじゃなくて価値としてちゃんと提供できた
かってことですよ。それができてるから次の数字も伸びるわけだし。自分がその取引に
かかわったことによって結果どれだけのヒトが納得したか、っていうか、そこにいる人だけ
じゃなくて全体的に社会的に幸せにするコミュニケーションができたかって話ですよ？
けど現実そういうふう動いてないじゃないですか、世の中。数字をあつかってる人間とし
て評価をうけるじゃないですか、みんな。給料とかキャリアとか自分たち営業は全部数字が
理由になって決まるじゃないですか。ヒトに与える感動とか価値の中身がそのまま評価され
るなんてこと、芸術家じゃないんだから、ないんじゃないですか。システムの。」
先輩「そうだよ」
チバ君「はい」
先輩「じゃあレベルってそれを納得した上で言ってたわけ」
チバ君「え、いえ、ちがいます」
先輩「バカ」
チバ君「すみません」
先輩「MBAとってもバカはバカだな」
チバ君「まだとってないです」
先輩「頭を使え、ほんとに。思考をしろ、思考を」
チバ君「はい」

先輩「それからその、え？っていうのいい加減やめろ。誰に向かって物言ってるんだ。出るぞ」
チバ君「はい、すみません」

先輩「犯人つかまったんだ」
チバ君「ええ」

先輩「19人って、」
チバ君「今朝速報来てました」
先輩「あそう」
チバ君「笑ってるし。極悪な感じで映ってますね。」
先輩「そうね」
チバ君「こういう異常な感じの、映しがいあるんすね。わざわざこういう瞬間選んでるし。」
先輩「ん」
チバ君「普段は普段ですよ、この人も。」
先輩「コンビニ行ったらしいよ。犯行後に、血の付いた1000円札持って。それ受け取って普通にレジ済ませた方も同じぐらい異常だけどね。」
チバ君「だから、なんか異常とはおもえないんですよ」
先輩「なにが」
先輩、スマホをいじる。メールが来た。
チバ君「犯人のやったことが。」
先輩「そうなの？」
チバ君「いえ、いつもテレビに映るのが犯人側だけだから、かもしれないですけど。なんか、あまりにも演出されてるから、演出されてないときの方を想像しちゃって、だとしたら異常じゃないっていうか、ありうるっていうか。」
先輩「演出されてないときって、どんな？」
チバ君「いえ、普通にこうやって定食食べたりとか、仕事の話したりとか」
先輩「ああ、こうやって」
チバ君「ええ」
先輩「食べてるね。」
チバ君「ええ、市役所の食堂で」
先輩「こういうのは映らないって、こと？」
チバ君「ええ、映ったとしてもたぶん見えないんでしょうけど」
先輩「見えないか」
チバ君「いえ、映ってるからたぶん見えてはいるんですけど。気がつかない」
先輩「まあそうだね、誰も気がつかないだろうね。あそこに（テレビを指す）これが映ってたとしても」
チバ君「そうですよ！犯人が普通に食堂でメシ食ってても、それが犯人だって気づかないから映らないんですよ」
先輩「そうだよ」
チバ君「そういうことかー」
先輩「お前、いま当たり前のこと言ってるぞ」
チバ君「例えばですけど、被害者の人も加害者と同じぐらい映してくれたら、被害者の、被害者じゃない瞬間を想像できて、バランス取れて加害者が異常だと思えるのかもしれない」
先輩「でもそのときはこうやって食べたりしてるのは被害者の場合でも映らないんだろ」
チバ君「被害者っぽい被害者の映像でもいいんですよ、いわゆる演出されたかわいそうな清純な感じのやつで。そうすればその人の清純じゃない普通のときを想像できるじゃないですか」
先輩「まあ、いまの理論からいえばね」

チバ君「ああいうの、やっぱり異常な人間っていうより、自分と地続きな気がします」

先輩「19人か」

チバ君「ええ」

先輩「食ったか」

チバ君「もうちょっとで」

急いで食べてるチバ君。

先輩「お前だろ。やったの。」

チバ君「はい」

二人、残りの食事を済ませて水を飲む。

先輩「コーヒー飲んで戻ろう」

チバ君「はい」

トレーを返却口においてエレベーターに向かう。

年配の男性がエレベーターから降りる。

先輩、エレベーターホール横の窓際で外を見ている。

年配の男性も窓の外を見ている。

チバ君、下に行くボタンを押す。

エレベーターを待つ。

先輩にまた電話がかかってくる。

先輩「これは、メールで。（電話無視する）」

先輩「あ、これか。」

エレベーター脇のパネルを見つける。

先輩「福島相馬道路、だっけ？」

チバ君「相馬福島道路、って書いてあります」

ホール横に掲示されたパネルをしめす。

先輩「いつできるの？」

チバ君「平成一、っと30年。再来年です。」

パネルと窓の外を見比べる二人。

先輩「80分が59分。無料なんだ、へー。相馬行くとき楽だね」

チバ君「そうっすね。領収証切らなくていいのか」

先輩「いいかげんETC入れろよって話だよ」

エレベーターが来る。

先輩とチバ君、乗る。

年配の男性、そのまま窓の外を見ているが、しばらくして、食券売り場のほうから食堂の職員の女性がくる。

職員の女性「上藤さん、ちょっと、いつからいたの」

年配の男性「（聞こえない）」

職員の女性「ちょっともーやだー、なんでー。こっち、はやく、こっち」

ふたりで食券売り場のほうに行く。

年配の男性、先をいく職員の女性の後をへこへことついていく。

食券を買う。

おわり